おしゃべりひめは、そこにいれられて、あんまりこわいので、いしのうえにねたまま、おいおいないていましたが、いつまでたっても、だれもたすけにきてくれません。おかあさまや、じょちゅうのなまえをよんでも、あたりはただしんとして、まっくらなばかりです。そのうちに、ひめは、なきくたびれて、うとうとと、ねむりかけますと、まもなく、「にゃー」という、やさしいねこのこえがきこえました。みると、むこうのくらいところに、こがねいろのねこのめが、ふたつ、きらきらとひかっています。おしゃべりひめは、さびしくて、たまらないところでしたから、このねこをみると、よろこんで、「ちょっ、ちょっ」と、よびました。そうすると、ねこは、すぐに、ひめのところへすりよって、のどをぐるぐるならしました。ひめは、ねこをだきあげて、こういいました。「まあ、おまえはどこからはいってきたの。このいしのろうやには、ねずみのはいるあなさえ、ないのに。おまえ、もし、でるところをしっているのなら、あたしに、おしえてちょうだいな！」「にゃー」「おや。おまえ、でていくところをしってるのかい」「にゃー」「じゃあ、おま

えさきにたって、あたしをつれていっておくれ」「にゃーにゃー」と、いううちに、ねこは、ひめのてをぬけだして、あるきだしながら、「こっちへ、いらっしゃい」と、いうように、ふりかえりました。おしゃべりひめは、ねこが、ほんとうにろうやのそとへ、つれ